

異なる対象への Grit に関する研究
－学生アスリートとその競技成績に着目して－
A study on Grit for different domains
-Focusing on student athletes and their performance-

スポーツクラブマネジメントコース

5020A305-1

岩尾敬太

研究指導教員：間野義之 教授

1. 序論

① 研究の背景と問題の所在

近年、アスリートのセカンドキャリアは様々な議論の対象となってきた。当然のことながら、全てのアスリートはいつか現役生活を終わらせる必要がある。しかし、現役のアスリートにとって円滑なキャリアトランジションを達成することはとても難しい。なぜなら目の前の目標に対して全身全霊を懸けて取り組むことが、成功を収めることの出来る手段だと言うことを、アスリートはしばしば考えがちだからである。このような背景を踏まえて本研究では、「競技で培ったスキルは本当にビジネス社会でも活かすことが出来るのか」という疑問を解明していくこととする。

② 先行研究

Grit は Duckworth ら (2007) が、米国陸軍士官学校の入学者を対象として「どのような士官候補生が、最後まで過酷な訓練に耐えるのか」という調査を行った際に注目された概念である。Grit は「やり抜く力」と訳され、この概念を用いて Duckworth らは過酷な訓練の脱落者と過酷な訓練を耐え抜いたグループでの Grit スコアを調査した。結果として、訓練を耐えたグループと脱落したグループでは Grit スコアに有意な差が生まれる結果となった。

さらに Duckworth ら (2007) は同研究中で、Grit スコアを用いて英単語のスペルの正確性を競うコンテストで勝ち進む子どもを予測したことが報告されている。また、Donna O'Connor et al (2016) は、オーストラリアのエリートユースサッカー選手を対象に Grit スコアを調査し、Grit が高い選手ほど状況判断についてパフォーマンスが

高いことを示した。上記の研究では、スプリングコンテストで優秀な成績を収める子どもやパフォーマンスの高い選手を Grit スコアにより明らかとしたが、果たしてこの両者の Grit の内容は同様のものなのだろうか。

一方秋葉ら (2016) は、大学アスリートと一般学生を対象に Grit 調査を行い、Grit 得点はアスリート学生と一般学生、アスリートにおける性差、総実施時間、競技成績では顕著な差がみられないと示した。また、Danielle et al (2019) はアスリート学生に対し、一般的な Grit スケール、アスリートとしての Grit スケール、学業についての Grit スケールを設定し調査を行い、アスリートの Grit が高いことを示した。

③ 研究の目的

本研究は Grit 能力の本来的な性質を明らかにし、それを基に学生のキャリア選択への一助となることを目的とするものである。また個人に備わるとされている Grit スコアは、その個人の身体能力や思考力に影響を受けることなく、その双方に同じ Grit スコアを発揮することが出来るのだろうか。以上の疑問は、Grit 能力をドメイン別に調査することによって明らかとなるだろう。

2. 本論

① 研究の方法

本研究では、競技を生活の中心とした学生アスリートの Grit を 3 種類のドメイン別に調査する。

本研究では、すべての対象者に年齢、競技継続年数、競技成績について質問した。競技成績は、全国大会出場経験無し、全国大会出場経験有り、全国大会入賞経験有りの 3 群に分け分析を行った。また、本研究では、Duckworth et al (2007) が開発した Grit 尺

度を竹橋ら（2019）が日本語に訳し検討を行い作成した日本語版 Grit 尺度を用いた。

② 結果

ドメイン別の Grit スコアの差を検討するために、反復測定分散分析を行った。分析の結果、ドメイン別の Grit スコアに有意な差が見られた（ $F(1.564, 458, 170) = 83.052, p < .001$ ）、多重比較（Bonferroni 法、5%水準）を行ったところ、全てのドメイン別 Grit スコアの間に有意な差が見られた。ドメイン別 Grit スコアの点数の推移をみると、スポーツ Grit が一般 Grit・学業 Grit より平均点が有意に高かった。また一般 Grit は学業 Grit より平均点が有意に高かった。

また、ドメイン別 Grit スコアの下位概念、CI（興味の一貫性）・PE（努力の粘り強さ）2つの因子の差を検討するために、反復測定分散分析を行った。分析の結果、CI（興味の一貫性）・PE（努力の粘り強さ）ともに有意な差が見られた。

さらにドメイン別の Grit スコアにおける競技成績の影響を分析するために分散分析を行った。その結果、競技成績はドメイン別の Grit スコアに対し有意であった。

③ 考察

・RQ1

今回の結果によって一般 Grit、アスリート Grit、学業 Grit すべてに有意な差があることが明らかとなった。ドメイン別の Grit に有意な差が出ることは上述の通りだが、その要因となる下位概念に着目してみると、PE（努力の粘り強さ）に関しては全てのドメインにおいて差が生まれなかった。一方、CI（興味の一貫性）については、アスリートが最も高く、次に一般、最も低い結果が学業となり、全てのドメインにおいて有意な差が確認された。この結果から分かることは、PE（努力の粘り強さ）に関しては他の分野への転用が可能だが、CI（興味の一貫性）によって対象への Grit 値が低い水準へと変化することである。つまり Grit の粘り強さはある程度転用できているが、興味を持っていないことが Grit 能力の転用を妨げており、よってアスリートの Grit 能力の他分野への転用は限定的と言える。

・RQ2

ドメイン別 Grit スコアを従属変数に設定し、競技成績を独立変数とした解析の結果、一般 Grit とアスリート Grit は競技成績に比例して高くなることが確認された。一方、学業 Grit は競技成績に対して有意な差がみられなかった。この結果からは、競技スポーツを目的として進学した学生アスリートにとって学業が興味を惹くものではなく、そのため競技における Grit が他のドメインに転用されないことの証明ともなった。

本研究結果は、アスリートがスポーツへの取り組むことが社会人としての資質を形成する一助となるという論説を一部否定するものとなった。しかしドメイン間の横断性が、限定的ではあるが下位概念の PE（努力の粘り強さ）に確認されたことは本研究の功績とも言える。つまり、CI（興味の一貫性）の横断が可能となる対象に対しては、「アスリート生活で培った Grit」を発揮する可能性が多いに期待されることである。

3. 結論

① まとめ

本調査により、以下の通り本研究の目的である「競技を生活の中心とした学生アスリートがドメイン別に Grit を測定した際に差が生まれるのか、さらにそれに競技成績に関連するのか」といった疑問を明らかにすることが出来た。

また本研究の成果は、「キャリアトランジション」に直面したアスリートの不安を軽減するものともなろう。スポーツに邁進することによって社会生活を営む上で重要なスキルが育まれているという仮説は今後の研究の課題であると同時に、スポーツ界全体の課題であるアスリートのセカンドキャリアに着目する研究なのである。

② 研究の限界

本研究では、スポーツ Grit と一般 Grit や学業 Grit の相関関係を解明するには至らなかった。それは Grit の形成過程を考察するものであり、異なるアプローチをかける必要があると考えられる。今後の展望としては小学生、中学生、高校生といった異なる領域における Grit スコアの調査から、スポーツの Grit が形成される時期や要因を調査していきたい。